

バンコク・ヤンゴン各一泊の旅

常 善光寺海外留学僧派遣育英会 佐 藤 俊 明
任 理 事

月桂冠はのマンディ

ビルマがミャンマーと国名を変えて二年しか

経つてないので、知名度が低く、私の郷里ササニシキの本場で「ミャンマー」などといおうものなら「ヤンマーだべえ。井関の耕運機」といわれそうな気がするが、そのヤンマージーゼルのヤン坊・マア坊の「天気予報」、今回ほど気になつたことはなかつた。

大型の台風十五号が九月九日昼頃、関東に上

陸するかもしれないというのだが、その日の十四時三十分に飛び立つというのだから無理もないことだ。

前日八日、定例の参禅会があつて、土砂降りの中を市川から来られた大内さん、帰途は電車が不通で三時間半かかつてようやくわが家に辿り着いたという。なるほど新聞を見ると千葉県内の交通はマヒ状態に陥り、成田空港直行列車も不通になつたため、高速道路が大渋滞をきたし、クルマを降り、重い荷物をかかえて雨の

中を走る人びとの写真が載っていた。

九日、朝は無風状態、まさに嵐の前の静けさだつたが、九時ごろから雨が降り出し、風も出て来た。台風は進路を東寄りに変えてくれた。おかげで関東上陸は免れたが、やはり正午ごろ一番接近するという。飛行機が飛ぶのかどうか、遅発か欠航か、とにかく空港で待機するしか手がないので十時に出発、間道を通つて、予想より早く十一時十分には空港に着いた。

横浜を六時に出発したという黒田理事長夫妻はすでに到着しており、お茶を飲んだり雑談していると、やがてタイム・テーブルにバンコク行き十四時三十分と、一時間遅れて出発する旨が掲示された。

所定の手続きを済ませて機上の人となつて間もなく、「台風のため遅れてご迷惑かけましたか、スピードを出しますので、到着は予定時刻より十分遅れる程度かと思います」という、ホ

コックピットにて



ツとするようなアナウンスがあつて、「機長は杉江です」という。それを聞いて、『機長に連絡をとらなくては』と思つた。というのは、前出の大内さんはかつてJALのスチュアデスで、いまは機長夫人である。昨日参禅に来られたついでに、飛行情報を早く入手するための連絡先をたずねたのだったが、帰宅してからそのしらせがあり、その際、「七一七便の機長は杉江という方です。連絡をとられたいかがですか」とのことだったからである。

機内食を済ませたところで、スチュアデスに名刺を渡し、機長に取継ぎを頼むと、しばらくして、チーフのスチュアデスであろうか、コックピットに案内してくれた。まことに素晴らしい眺めであつたことに加えて理事長の親戚の萩原雄一郎氏がかつての日航の専務だったこともあっていろいろ話がはずみ、予期もしなかつたらしい旅のひと駒となつた。

現地時間で午後六時、ドンムアン空港に着く。台風で到着時刻が測り知れないため出迎えは不要と連絡済みなので、旅行社の係員だけの案内でホテル・シャングリラに向い、旅装を解いたのが八時。

エレベーターに乗ると、床のカーペットに「マンデイ」と大書してあり、上に「サワディ」(今日は)、下に「ハブ・ア・ナイス・デイ」(いい日でありますように)と小さく書いてある。

“ああ、今日は月旺日か。明日は「チユーズデイ」と変わるんだな。毎日カーペットを取り替えるのか。えらいもんだなあ”と、サービスに対する努力に敬意を払つたが、ふと、七旺を覚えるために努力した人の苦心のほどを思い出して、ひそかにほくそ笑んだ。

日本人は乃木サンデイ
月桂冠は飲マンデイ

火は水にチユーズデイ

水瓜は冬にくウエンズデイ

木刀腰にサースディ

金魚もたまにはフライディ

土用はとつくにサタディ

月桂冠は飲マンデイだが、旅の第一夜とあればそういうわけにもいかず、祝杯を挙げることになった。

留学僧が世話になつてゐることに謝意を述べ、加えて筆者の私について触れ、「庫裡も完成し、副住職もきまり、そして目下靈園の新設を進めているが、なんとか日本一の靈園にしたいと願つてゐるから、お仏舎利をお預けいただけないか」と懇願してくださつた。

十日、十時半、小谷先生が迎えに来てくださる。半年ぶりの再会である。

聞けばワット・パクナムのご住職は前立腺手術のため入院し、つい最近退院したばかりのこと。

また、アーチヤン（河北副住職）はその後、緊急入院し、退院はしたものの、すっかり瘦せてしまつたとのこと。したがつて今回の訪問はまず病気見舞が主となつた形となる。

理事長はまずお見舞を申し上げ、次に三人の

三人の留学僧のうち一人は公務で他出中、落合君だけしかいなかつたので、十三日に三人に会うことにして、そのまま退出しようとしたところ、食事の準備をしてゐるからとのことだつたので、サーラー（食堂）に赴き、清衆に食事

供養をして、ここで昼食をいただいた。

熊の縫いぐるみを持った小父さんの国

いよいよミヤンマー入りである。

ミヤンマーは日本からは直行便がないので、バンコクを経由するほかない。

ドンムアン空港に着いたのが午後二時過ぎ。旅行業者が搭乗手続をしている間、待合室の椅子に坐ると隣りが日本人で、元気のない、沈んだ顔つきをしている。「どこへ行かれますか」と問うと、ネパールへ行くのだという。

「いやア、今回の旅行はさんざんですよ。四十人のツアーを組んだのですが、台風で出発が一日延びて半数がキャンセル。ようやくここに着いたと思ったら三時間半遅れですよ」

なるほどタイム・テーブルを見ると、カトマンズ行き二時発が五時三十分出発予定となつている。"たいへんだなあ、お氣の毒に。それにく

らべて私たちは一時間足らずの飛行で到着できるミヤンマー行きだし、遅発の掲示もない。この人たちが出発する時刻にはヤンゴン（ラングーン）に着くはずだ』と、その時そう思つたが、こちらもやはり思いどおりにはいかなかつた。

バンコク→ヤンゴン間には、ミヤンマー航空が一日一便、タイ国際航空が週に三便就航している。私たちは往きはミヤンマー航空、帰りはタイ国際航空を利用することになつていた。

ガイドブックによると、ミヤンマーの国民所得は一一三米ドルで、一九八七年に国連から最貧国と認定されている、とある。一一三ドルといふと、一ドル一五〇円としても一六、九五〇円にしかならない。そんなに貧しい国の飛行機はたしてよく整備されているのだろうか。安全なのだろうか。どんな飛行機が飛んでいるのだろう、と考えると、カトマンズ行きの隣人のようにあまり明るい顔にはなれなかつた。

搭乗手続を終えた旅行業者がキップを持って来たので所定の閑門を通過して出発ロビーに入つた。同じ国際線とはいえ、ここはまたまことにお粗末なロビーである。家庭用テレビ大の小さなタイム・テーブルに、ミヤンマー行きのゲートは六番と出ている。ところがキップには四番ゲートとスタンプが捺してある。

“どつちがほんとうなんだろう”とまた不安材料がふえる。それだけではない。刻々出発時刻が迫つてくるのになんの通告もない。とうとう出発定刻四時九分になつたが、うんともすんともない。言葉は通じないし、周囲の乗客の動きを注視するほかない。

四時二十分、尾翼にミヤンマー航空の標識をつけた小さな飛行機が、滑走路に着陸態勢で入つてくるのが望見された。

「あれだな、あの飛行機が折返すのだな」と、ようやく状況が読めた次第。案の定、五時少々

前に搭乗開始となつた。四番ゲートに集まつた乗客を見ると、中古の扇風機を持った人あり、ラジオをかかえてる人あり、大きな熊の縫いぐるみを持つたチョビひげの小父さんあり、一見してミヤンマーの人たちとわかつた。バスに乗つて飛行機に近付くと、機種はフォッカーカーか、七、八十人乗りの、耐用年数をとつくに過ぎたと思われる、ふるぼけて汚れた飛行機だつた。

タラップを登つて機内に入るのだが、遅々として動きがない。機内が狭いので手間取つてゐるのか、それにしても遅いなア、と思つてたが、ようやく機内に足を踏み入れてわかつた。座席番号を無視してすわる人が多く、そのため席の入れ換えに手間取つてゐるのだった。現に私の場合も九番のA席に進むと、例の熊の縫いぐるみを持つたチョビひげの小父さんがすわつていゐる。キップを見せると、ニヤッと笑つて立ち上り、近くの空席に腰をおろした。そこへまた指

定の乗客が来たので、彼はまた立ち上つて後部座席の方へゆかざるを得なかつた。限無く席をさがせばいいのに熊があるからできなかつたのだろうか。

乗客が座席につき終ると、お茶が出た。実にタイミングがよい。大きな飛行機だとこうはない。そして紙コップでなく本物の茶わんである。感触はいいが、果して清潔なのだろうかと思うと、やはり新しい紙コップのほうがいいような気がする。飛行機が上空に達すると弁当が出た。機内食といえばたいていパタンがきまつているが、ここでは容器が菓子折りのサビス箱みたいなもので、十数年前の中国旅行の際の弁当と同じスタイルである。時代遅れのか社会主義方式なのか、とにかく西欧化には一線を画している感じである。

帰りの飛行機に乗つてわかつたことだが、ミヤンマー航空を利用するものは自国民が大部分

のようで、外国人の多くはタイ航空を利用しているように見受けられた。ミヤンマー航空のふるい小型機に対してもタイ国際航空は国際航空の名にふさわしくA三〇〇の新型機で、乗務員も乗客もみな国際的な感じだつた。

さて、飛行機がミャンマーの領内に入ると、一面緑の平野で、工業団地らしいものはどこにも見当たらない。また雨季なので当然のことながらも知れないが、まるで大洪水のように広範な地域が水びたしになつていた。

“ミヤンマーつてたいへんな国だなあ”と心に呴きながらこうした単調な風景を眺めているうち、雨にけぶるミンガラドン空港に着陸した。

「ミンガラドン国際空港」といわれるが、どうみても国際空港とはいえそうもない。国際飛行場といつたほうが適切かも知れない。

飛行機から降りて雨の中を場内の小さな建物

に足を運ぶとそこが入国管理事務所である。まるで取調室に入れられたようで、背筋にひやりとしたものを感じた。中国旅行がまだ一般化されてなかつた昭和五十四年、浙江省の招きを受けて香港・マカオを経由して中國領に入ったのだが、関門に足を踏み入れた途端、同じような感じを強烈に受けたことを思い出した。その時は地続きであつただけに、外国から急に異国に入つたような感じだが、今回もそんな感じだつた。そういうえば男の人がロングジーといわれるロングスカートといつたらよいか、腰巻様のものを着用しているのも異国風だつた。何だか異次元の世界に来たようだ。

税関の検査はきびしく、まず所持している外貨を申告しなくてはならない。これは滞在中および出国の際の所持額と照合するためのもので、一ドル合わなくとも出国許可が得られないというからおつかない。それからミャンマー国

内で高く売れそうなもの、たとえばカメラ、ラジオ、カセット、テープコーダーなどの電気製品の持ち込みは一々詳しくチェックされるし、カメラは二台以上は持ち込めない、といった風でなかなかやかましく、手続きが複雑である。

“こんなに複雑な仕組みでどうして大勢の入国者をさばくのだろう”と思つたら、この飛行機の入国者は私たち三人とドイツ人二人、計五名だけとのこと。そうだとすると、ある程度手続きを複雑化しないと時間が余つて困るのかも知れない。

雨の中を、飛行機から建物の方に乗客の荷物を肩に担いで四、五人がやってくる。運搬車両はないのだろうか。それとも失業対策なのだろうか。雨の夕暮れだけにこちらもなんとなく滅入つた気持になつた。

“荷物はこれですね”と、現地の旅行業者がいう。“そうち”というと、運んで来た一人が手

を差しのべた。まだ両替もしないので、止むを得ない、理事長が戦没者への供養のため持つて来た煙草を一箱出すと、その男は『もう一人いるんだ』といわんばかりに二本指を立てる。さらに二箱をやると子供のように嬉々として立ち去つた。

手続きを終えて建物の外に出ると、大勢の人びとがたむろしていた。見送りでも出迎えでもなさそうだ。何か仕事にありつけないかと待機しているように見える。小さな子供が近寄つて来て、手を差しのべて憐みを乞う。『かわいそうちだなア』と思い、それにしてもこの貧困の原因は一体何なのかと考えさせられた。

ミャンマーは百年ほど前にイギリスの植民地となつたが、第一次大戦の頃から独立運動が起り、四十三年前（一九四八年、昭和二十三年）一月、イギリスより完全独立を達成し、「ミャンマー連邦社会主義共和国」となり、対外的には

非同盟政策のもと、激動するアジアの情勢の中で鎖国的ともいえる中立主義をとり続けて今日に至つている。

二十九年前（一九六二年、昭和三十七年）総司令官ネ・ワインはクーデターにより政策を掌握し、憲法を停止し、国会を解散し、革命評議会を主宰し、農民と労働者を基盤に公正にして豊かな社会主義国家を建設しようとした。しかし、軍備の拡張やあまりにも急進的な国有化政策などで経済は低迷し、失業が深刻化し、三年前の六月、ヤンゴン市内で学生が暴動を起こし、デモと暴動は全国にひろがつた。翌月ネ・ワインは一党独裁制から複数政党制への移行を決定した。ところが軍部が実権を掌握したままで、昨年五月におこなわれた国民投票の結果はまだ黙殺された形のままである。

少数民族の複合体であるミャンマーには少数民族の反政府運動が絶えず、また共産党勢力の

反乱工作などにより国内治安は不安定にさらされ、加えて社会主義体制の内部矛盾と鎖国的中立政策により国内経済の窮乏化は深刻である。

と、ガイドブックは述べている。

迎えのジー・インヤー・レーベ・ホテルに向かう。空港から約二十分、市の北部にあるインヤ湖の湖畔に建つこのホテルは、独立直後のミャンマーが国威を内外に宣揚するために建造されたものであろう、豪華な大ホテルである。だがその後鎖国的な状態にあって観光客が減少したためか、建物が豪華な割には整備、管理がゆきとどいていない。大きなルームに通されたら、まずカビ臭い匂いにおどろいた。

こんなに素晴らしい自然環境のいい国に一日も早く多くの観光客がやってくるように望まれてならなかつた。

炎天樹下忠魂を弔う

第二次大戦中、約三十万余の日本軍がミャンマー（ビルマ）を戦場として戦つた。そして十八万人がここで戦死しているので、戦跡慰靈巡回団が年々この国を訪れている。しかしあつての戦友も高齢化したため、その数は激減の一途を辿つてゐるといわれる。

ヤンゴンには二つの日本人墓地がある。一つは市の東部タエムにある。これはもともと在留民間日本人の墓地だったが、戦後、日本将兵が捕虜生活中に英軍より資材援助を受け、慰霊碑を建立し、秘かに保有していた戦友の遺骨の一部をこの地に埋葬したという。

いま一つは、戦死者の遺骨を日本に送ることが事実上不可能となり、英軍からの没収をさけたためチャンドウ墓地（市の西方）に埋葬したという。いずれにも鉄扉に「日本人墓地」と大

書してある。

両方の墓地に足を運び、理事長が日本から持参した塔婆を立て、酒、煙草、菓子を市内で求めた美しい花と共に供えて一人で読経回向した。終戦以来四十七年、戦場を知らない人にとっては戦争体験はすでに風化しているかも知れないが、数年間戦場に身をさらした私にはまだ鮮烈な思い出が体のどこかに残つており、それが折に触れて噴出するのである。

遠到緬甸塔様新（遠く緬甸に到れば塔様新た
なり）

炎天樹下弔忠魂（炎天、樹下、忠魂を弔う）
丹心報國凝無返（丹心国に報じ、凝つて返る
ことなし）

合掌低頭熱涙頻（合掌低頭すれば熱涙頻りな
り）

慰靈碑前にて



香語を唱えた私に、半世紀前の戦場体験が蘇ってきた。(註・以下文中表記は戦時中のまま)

終戦当時、私は上海にいた。昭和二十年八月十一日、上海では、中国側の新聞が一斉に日本がポツダム宣言を受託して無条件降伏した旨を書き立て、待望の和平が到来したことを報道した。するといつの間に準備していたのか、米・英・ソ・中四ヶ国の国旗を手に手に打ちふって勝利を謳歌する上海市民のデモ行進が開始され、日本人は軍人であろうと一般邦人であろうと、石を投げられ、ツバを吐きかけられ、市街はにわかに騒然となり、状況まことに樂觀を許さないものがあつた。日本人の或る者は「これはデマだ。謀略だ。騙されちやいかん」といい、また或る人は「いや、ほんとうだ。日ごろ心配していた最悪の事態がついにやつて來たのだ。こりや、たいへんなことになつたぞ」と、深刻

な不安におののくのであつた。

安岡上等兵は、こうした雰囲気を生き抜くにはあまりにも純情というか単純な男だった。上海在住の伯父の病状が悪化したので外出許可を受けて見舞つた彼は、伯父の死期の近付いたことを知らされ、重い足取りで病院から隊に戻る途中、上海市民のデモ隊にぶつかり、さんざんな目に会つた。すでに正常な判断を失つた彼は、隊に帰るなり強い酒をあおり、酔っぱらつて拳銃を持ち出し、空間に向けて一発ぶつぱなし、びっくりしている戦友たちに向つて、「安岡上等兵は戦争に負けるような日本に用はない。おう、戦友！ 安岡の最期を見ておれ！」と、わめき立てて拳銃をこめかみに当てようとした。その時、狂乱の彼に素早く飛び付いて拳銃をもぎ取り、彼の命の破滅を未然に救つたのは内務班長の津村軍曹だった。(註 私の部隊は無線探査隊といつて敵の無線スペイを探査する特別部隊だった

ので兵隊たちも小銃ではなく拳銃を持つていた

この日はいま思い出してゾッとする混乱の日だつたが、翌十二日は薄氣味悪いほどの静寂が街全体を包み、そして十三、十四日と混沌とした日が過ぎて八月十五日、最悪の事態は遂に明るみに出た。神と仰ぐ天皇陛下が御自らラジオを通じて放送されるという前代未聞の一瞬がやつて來た。白布をかけた机の上にラジオ受信機を安置し、その前に中隊一同が整列し、私の号令で最敬礼し、気を付けの姿勢で玉音放送に耳を傾けたのだが、どうしたものが電波の動搖が甚しく、實に聞き取りにくく、中には、忍び難きを忍び、耐え難きを耐え、今後一層奮労努力せよ、とはげましのお言葉をいただいたものと勘違いして万歳を三唱し、何はともあれこの感激をと、乾杯して氣焰をあげた部隊もあつたほどだつた。こうした笑えぬ喜劇を演出したそ

れほど聞き取りにくい受信状態だつたのだが、この玉音放送を聞いた將兵の心理状態はそれ以上に把握しにくい複雑なものだつた。

午后になると上海の街の日抜き通りの建物という建物の窓や壁には青天白日旗や米・英・ソの国旗や、「蔣主席万歳」「中國陸軍大戰勝万歳」「和平再來」「慶祝中國解放」といった文字をならねた垂れ幕が公然と掲げられ、馬車マオチャオや黃包車ワンドバオチオ（人力車）までが勝利の旗をなびかせて街を走るといった変わり方だつた。

ついにきたるべき時がきたのだと、頭では承知していても情においてこれを信じ切ることができない未練がある場合、人はともすると現実の傍にいま一つの現実を設けてそこに逃避を試みるものである。大命の絶対を信じ、かつ実践することにつとめて来ておりながら、支那派遣軍が大命とは別個に独自の行動をとつてくれるこことを強く願い、また必ずそうなるであろうこ

とを堅く信じて疑わなかつたのは、ひとり安岡上等兵のみではなかつた。

何かしらたのもしいひびきを与える「身辺を整理して待機せよ」という司令部よりの指示。出動準備を要求するかのような「和戦両様の構えで次の指示を待て」という部隊本部からの連絡。乱れ飛ぶデマ。まことしやかな希望的憶説。

「おい、陸戦隊ではまだ依然として陣地構築をやつてるぜ」「陸戦隊じや最後の一兵まで戦うといつてるよ」「そりやそうさ。陸戦隊が上海を捨てることは國賊になるよりつらいことだからなア」「司令部は七割までが決戦論だそうだが、お偉ら方のほとんどが和平論で、なかなか方針がさだまらんそうだ」「老頭児(ロウトル)（年寄り）は駄目だなア。たたき斬つてしまわにやいかんよ」「大体、支那派遣軍は無キズじやないか。それになんといつても自活態勢がすっかり整つているからなア。人だつて糧秣だつて、武器だつて弾薬

だつて、何一つとして内地から補給してもらつてるものはないんだ。内地からの補充はとつくの昔にとまつてゐんだからなア。いや、却つてこちらから内地に補充してくるくらいなんだから絶対大丈夫だよ」「……」「……」

寄るとさわるとこんな話が語りつづけられていたが、およそ希望的観測というものは、それが大きくまた強ければ、それだけに苛酷な現実の仕返しに会わねばならぬものである。

八月十六日午后、待望の軍事令が下達された。命令の大綱を示す第一条には次のように述べられていた。「支那派遣軍ハ大命ヲ奉ジテオヲオサメル」と。

このわずか二十字にも満たない軍命令の第一カ条によつて、前日来のすべての希望的観測に終止符が打たれ、将兵はあまりにも苛酷な現実の真只中に放り出された。しかし、さいわいにも約二十四時間という時の流れは、前日の混乱し

沸騰した興奮をば、すでに過去の世界に追いやつっていた。とはいものの百万の若い生命の興奮を一つの例外もなく冷却することは創造主ですらなし得るところではなかつた。

右手を怪我して治療のため陸軍病院に通つていた正木兵長の帰隊がいつもより遅いのでふと気になり出ると、虫のしらせとでもいうのだろうか、中国人経営のある病院から、彼が拳銃の弾丸を胃と腸に打ち込んで生命危篤だからすぐ来てほしい、と電話が入つたのはこの日の午後四時頃のことだつた。

取るものも取りあえず病院に駆けつけると、瀕死の重傷を負うた正木兵長はかぼそい声で、しかしあつきりした語調で、「隊長殿、見苦しい姿をみせて申訳ないであります。心臓を狙つたんであります、恥ずかしいことであります。やつぱり腹ができるであります。手がふるえて狙いが定まらずまだ死に切れないので

おります。しかし隊長殿、なんにも言わないでこのまま死なしていただきたくあります。おねがいであります」と述べ、やがて静かに瞑目したのであつた。

これはもとより覚悟の自決で、彼が私と戦友に宛てた遺書には「生きて虜囚のはずかしめを受けることを潔よしとしない帝国軍人の血の流れをどうしても阻止することができないから……」としたためられていた。

私は直ちに隊に戻り、下士官を集めて軽挙妄動を堅く戒めると共に、兵の監督指導に充分留意するようとに指示した。しかし、陛下のラジオ放送以来、他の部隊の将兵の中にも、また陸軍病院の看護婦の中にも、敗戦に対する悲觀と憤りから自決した者があり、その噂がどこからともなく伝わつて来ており、そうした他部隊の噂とともに、より身近な正木兵長の自決は、若い一団の生命に強いショックを与えるにはおか

なかつたのである。良心的な、英雄的な、そして日本的な行為としての自決を礼讃する狂風は、すでに過去の世界に葬り去つた興奮の焰を逆の方向にあおり立てていた。

混乱した興奮の沸騰し奔流する血潮がいま正に現実に甦えろうとする不安定な、そして危険な状態におかれているこの日の夕方、私は、人もあるうに十一日すでにひとたび自決を企てた安岡上等兵の伯父が危篤に陥つたので、ぜひ彼を病院によこしてほしい、という電話連絡を受けとつた。

私がいわゆる軍人らしい軍人だつたら言下にそれを拒否したであらうが、相手のおかれている状態や、その抱いている心情を無視して、物事をドライに割切ることのできない私であり、ましてや敗戦下の異国の街で、肉親の死目にも会わしてやらないことは、たとえどんな理由があらうと、それはあまりにも冷酷過ぎる、そう

考えて私は安岡上等兵の外出を許可することにした。そして安岡上等兵に対し、堅く輕撃を戒め、絶対に間違つたことをしないという約束をとり、それでも心配なので小西軍曹を同道させることにした。

小西軍曹と安岡上等兵が出ていつて一時間近く経過した頃、ふと、けたたましく電話のベルが鳴つた。何かしら不吉な予感に襲われて受話器をとると、小西軍曹がフランス租界にあつた河井家の門前で、眉間に拳銃弾を打ち込んで即死したというしらせであつた。(注 私の隊は分隊ごとに分散して不審な電波の監視と方向探知にあたつていた。小西軍曹は協力者である河井家の離れの建物で勤務についていたので、世話をなつた河井家を訪れ、永遠の別れを告げて自決したのであつた)

私はすぐ安岡上等兵の行つた病院に電話したが、彼はすでに病院を出たあとだつた。そこで

直ちに下士官に集合を命じ捜索隊を編成し、安岡上等兵が病院から帰る要所要所にこれを配置して、安岡上等兵を見つけたら有無をいわさず連れて来いと命じた。

一方、安岡上等兵は病院を出て約束の時刻、約束の街角に来たのだが、小西軍曹の姿が見えないので、心配になり、小西軍曹の安否を気遣い、もし万一千ことがあればとても隊には帰れないと思つていた。彼には小西軍曹と別れたことが悔やまれてならなかつた。では一人はどうして別れたのか。

二人が隊を出ると間もなく、小西軍曹から「実は班長にも用事があるから別行動をとろうぢやないか」といわれ、「班長殿さえよかつたら」ということで再会の時と処を約束して一人は別行動を取つたのであつた。

安岡上等兵がいよいよ不安になり、このまま待つても仕様がない、さてどうしようかと思つ

ていた時、うしろに人の気配がして、「おい、安岡！」と、津村軍曹から利き腕をがつちりと押さえられた。

「こんなにおそくまで一体何してるんだ。みんな大騒ぎしているのがお前にはわからんのか！」

安岡上等兵は私の前に連れて来られ、「も、申訳ありません。隊長殿、小西班長殿は帰られたのですか。……わ、わかりました。やっぱり、班長殿はやつたんですか」

安岡上等兵は滂沱と流れる涙を軍服の袖に不器用にぬぐいながら、

「小西班長殿、どうして安岡を連れていつてくれなかつたのですか。安岡、うらみます。捕虜になつてまで生きるなんて！中国人の下で働くなんて。二十三年間、この体を流れている血が血がゆるしません。隊長殿、安岡にも自決させていただきたくあります。安岡、一生

のお願いであります」

「安岡、自決、自決というが、自決は自殺と同じことなんだぞ。自決といえども男らしく軍人らしく聞こえるが、結局は生活に負け、競争に負けて自殺するのとかわりないことなんだ。自分自分の命を断つことは勇気のいることのようだが、実は弱い者の選ぶ道でしかないんだ。この隊長だつて、これまで何度死のうと思つたかしれない。しかしその都度、耐え難きを耐えて生きてゆくところに人生の意義があるんだと思ひ返してより強く生きて来たんだ。

安岡、われわれがいま一時の感情に負けて自ら命を断つたら日本は一体どうなるんだ。日本の再建にはおれたちの若い命と情熱が必要なんだ。われわれが日本を再建しなくては英靈が浮かばれないではないか。貴様、それでもいいと思うのか。安岡、生きるんだ。逞しく生きるんだ。強く生きるんだ。いいか、わかつたか」

こうして私は彼をなだめるのに翌朝までかかったことを思い出したのだが、生きて虜囚の辱めならばなんで命が惜しかろうと身を鴻毛の軽きに任じて、日本からもつとも遠かつたこの地で戦場の露と化した幾多の英靈のことを思う時万感胸に迫るものがあつた。

実は昨年六月、日本パクナム会の総会をワット・パクナムで開き、その際、戦場に架ける橋で有名なカンチャナブリに赴いて、そこで慰靈法要を盛大におこなう予定だつたが、ワット・パクナムの住職副住職の一一行がアメリカ巡錫のため沙汰止みとなつた。気がかりになつていたが、さいわい今回、二人だけの読経ではあつたが、心からの慰靈法要ができるによかつたと思つてゐる。何かしら肩の重荷をおろしたようだ。

心豊かな人びと

大乗仏教、小乗仏教という。読んで字のとおり、大乗とは大きな乗物、小乗とは小さな乗物。舟にたとえれば渡し舟が大乗。多くの人を乗せて迷いの此岸から悟りの彼岸に運ぶ。船頭は上陸しないで此岸に戻り、また人びとを彼岸に運ぶ。「己れ未だ度らざる前に一切衆生を度さんと発願したいとなむなり」これが大乗菩薩道である。小乗は一人乗りの小さな舟で、自ら舟を漕いでまず自分が彼岸に渡る。小乗仏教の坊さんは二二七の戒律を堅く守り、自らの悟りのために修行にはげむ。信者たちは坊さんの衣食住のすべてをまかなってくれる。そうした信者に支えられ、信者の代表として、身代りとして修行にはげんで悟りの岸に至る。

同じ仏教であるが大きく違う。ただ、大乗に対する小乗では軽蔑の印象がなくもないのに、

小乗といわば上座部仏教といわれるようになつた。ちなみに日本は大乗仏教、インド・スリランカ・タイ・ミャンマー等は上座部仏教である。

『維摩經』に「問疾品」という一章がある。

間疾とは読んで字のごとく病気を問うこと、病気見舞のことである。これはどういうことかといふと、維摩という名の居士が病気になる。いや、病気の状態をあらわす。それに対してお釈迦さまの弟子が維摩の病気を見舞い、病状をたずねる。すると、維摩は自分の病氣にかこつて大乗精神を説くのであるが、その維摩の言葉に「衆生病むを以ての故にわれ病む」という有名な一句がある。衆生とは生きとして生けるものすべてを指すが、「人」に限定して考えたらわかりやすい。衆生病むを以ての故にわれ病む——大勢の人が病気になつているから私も病んでいふ、というのであるが、これは一体どういうことなのであろう。

「衆生病むと以ての故にわれ病む」という維

摩居士のこの言葉に関連して思い出すのは、「人の乳児が牛乳を飲み得ないでいる間は、おとなは決して牛乳を飲まない」ということが社会主義だ」という言葉である。これはレーニンの言葉だ。そうだが、社会を離れて個人はなく、個人を別にして社会はない。そうであれば、子供の救われる道が確立しないでおとなは助かる道のあろうはずはない。そしてまた、一切衆生の救われる道が明らかにならない限り、自己の救済はあり得ない。それ故に牛乳を飲めないで泣き叫ぶ乳児の声が巷にあふれており、国民は食いや食わざの生活を強いられている。ミヤンマーの政治はこれをどう救おうとしているのである。一人の乳児が牛乳を飲み得ないでいる間はおとなは決して牛乳を飲まないという社会主義の理想が達成できるのであろうか。

そして、こうした中で坊さんは托鉢の伝統を堅くまもつており、信者はまたやうやしく供養をしている。これが日本だつたらどうだろう。
「てめえが食えねえのに施しなどできるか」と、托鉢僧を無為徒食の輩として非難するであろうが、ミヤンマーの人たちにはそんな気風は

る。

レーニンの理想を掲げながら、現実にはその理想に反した政治がおこなわれて来たため、民衆の総反撃を喰らつて社会主義国は次々に音をたてて崩壊し、レーニン像はひきづりおろされた。ミヤンマーはいま牛乳を飲み得ないで泣き叫ぶ乳児の声が巷にあふれており、國民は食う

— 78 —

みじんも感じられない。まことに敬虔な態度で供養している。

また、托鉢する側に立つて考えてみると、お釈迦さまの法を継いだ摩訶迦葉尊者は、貧しい家を選んで托鉢したというように、貧しい中の布施こそ真の布施に価する。その布施の心を養つてやるためにも貧しい人への托鉢は大切なのだ、とはいつとも私ども日本人に果たしてそれができるだろうか。

「衆生病むを以ての故にわれ病む」托鉢に出るよりは救済の道を講すべく思いを致すのではなかろうか。それは昔の高僧名僧の事跡に明らかである。また現に曹洞宗ボランティア会が上座部仏教の国タイで救済活動を開拓しているのがそのいい例ではないか。この運動の源流は十数年前にさかのぼる。カンボジヤ難民がタイ領内にどつとなだれ込み、方々に難民キャンプが急造され、これが救済が世界の話題となつた。

曹洞宗は逸早く調査団を編成した。私は大本山総持寺代表としてこれに加わり、タイに渡つて難民キャンプを視察し、救済の方途を模索した。そしてワット・パクナムはじめ二、三の有名寺院を表敬訪問し、難民救済についての上座部仏教の対応の在り方をさぐつた。

「それは政治に利用される危険性がある。仏教教団のやるべきことではない」というのがそのままの返答だった。

同じ仏教でありながら、どうしてこんなに違うのだろう。小さな舟に人を乗せれば転覆してしまう。それもそうだがなアと思つてると、二人の少年僧がやつてきた。鉄鉢の蓋の上にはバナナが二本載つている。黒田理事長がチャット紙幣を鉄鉢に載せて供養したまではよかつたが、私たちは帽子をかむつたままの姿だったことを写真を見て反省させられた。ミヤンマーの人たちはこうした慎みのないことはしない。供養し

てひざまずいて合掌するのである。

ヤンゴンの街は美しい。二百五十年前、アラウン・パヤ王がミャンマー全土を平定し、王朝の都をパゴーからこの地に遷して、「戦いは終つた」という意味のミャンマー語である「ヤンゴン」という名をつけた。それから百年後、イギリスが占領して「ラングーン」と改名して近代的都市づくりをはじめた。そして一昨年「ヤンゴン」と元の名に改められた。

市街は整然として、处处に木立の生い茂った広場があり、パゴダや記念碑がいたるところに立っている。パゴダの中でひときわ目立つて有名なのが、『聖なる金塔』を意味するシュエダゴン・パゴダで、街を見おろす丘の上に屹立している。その姿は雄大にして莊厳、まことに美しい。高さは九十八メートル、円周囲四百二十六メートルという世界最大のもの。このパゴダは

少年僧と





老僧と

五百八十五年に造られた時は高さ一メートル
だったそうだが、その後王朝の推移するなかで、
権力の強かつた王たちが拡張し、十五世紀の頃
に今のような形になつたという。このパゴダの中には五千個以上のダイヤモンドが収蔵されて
おり、その周囲に四つの大きなパゴダが配置して
あり、六十四個の小パゴダ群が取り囲んでい
る。その中を歩いているとミャンマーの人たち
が親しそうに近寄つて何やら話しかけてくる。

戦争中はいろいろ迷惑もかけたであろうが、イ
ギリス軍と違つて、日本軍や日本の兵士はミヤ
ンマーの人たちにたしかにいい影響をあたえて
いる一面がある。それがミャンマーの人びとの
仏教精神に基づく寛容な気質と相俟つて、同じ
アジアの国である日本と日本人に親近感を抱いて
いるといえる。

一人の老僧が近寄つて来て、「あなたがた日本人
人だな」と話しかけ、「日本の兵隊知つてゐる。

西村、滝沢、」といかにもなつかしそうである。

「あなた、お齢は？」と訊ねると、「七十六歳」だという。私より一つ年うえだ。だとすると戦時中は同年輩の日本兵と、独立運動などあるいは行動を共にしたこともあるのかも知れない。

同じアジアの人として、同じ仏教徒として、心豊かにして人懐かしいミャンマーの人たち、その心のよう経済的にも豊かになつてほしい。それでもっと自由に往来できる国になつてほしい。

ヤンゴンの北東約八十キロのところにペグーという古都があり、ここには『ビルマの豊琴』に出てくる有名な寝釈迦仏がある。この寝釈迦仏を拝観するため、ガタガタ道をクツショーンの堅いジープを飛ばして往還した。

寝釈迦の像は今から千年前に造られたという

ことである。非常に均整のとれた優美なもので、全体がまるで生きてるかのように見える。全長は五十五メートル、肩の高さ十六メートルという大仏で、レンガ造りの本体に漆喰を塗つたまつ白な姿で横たわっているが、ペグー王朝の滅亡と共に忘れ去られ、密林に覆われた丘のようになつて人知れず百二十年もの間眠つていたといふ。たまたま鉄道工事用の土を求めてこの丘を掘りはじめたインド人技術者が発見し、世界最大級の寝釈迦像として知られたのだという。今から百十年前のことである。その後完全に修復され、今は大屋根で保護されている。

寝釈迦というと涅槃像を連想しそうだが、そ
うではなく、休息しておられるお釈迦さまのお姿なのである。二月十五日の厳しい寒さの中に
併む厳肅な涅槃のお姿ではなく、暑い南国でお見受けするおおらかなお姿といつた感じであ
る。

留学僧との語り合い

きたいと思います。司会は佐藤ご老師にお願いします。

佐藤 またバンコクにやつて参りました。来

十三日、ホテルで目を醒ました時、"ああ、バンコクに戻ったんだなア"と、ホツとした気持になる。

朝十時、小谷先生はじめ三人の留学僧が見え

る。小谷先生のオフィスの近くの日本料理店"花屋"に出向き、黒田理事長が三人の留学僧に食事を供養し、終つて座談会をおこなう。

また三人の留学僧の皆さんのが元気な姿に接し、嬉しくまたたのもしく存じます。方丈さんがいいつどいを設けてくださいましたので、皆さんのご修行の現況、そして将来の方針や育英会に対する要望などお聞かせ下さい。

まず最初に落合君から：

落合 こちらに来てもう半年になりました。
黒田 お二人他出でしたが、今日は三人そろつてお出ましをいただき本当に有難うございました。

今回『成寿』第十八号の取材のためミャンマーに行き、昨晩帰つて参りましたので、この機会に皆さんにお食事を供養させていただき、ついでにせつかくのお集まりですから座談会を開



ております。

たとえば一時僧（注 タイでは男子二十歳に達すれば

多くの人が一

時仏門に入つて修行する。

だんだん忙しくなつて来ましたし、また寺の方にも托鉢に費す時間を勉学にふり向けたいという考え方もあり、食物を現物で寺に持ち込むケースが多くなりました。形が變つて來ただけで数が減つたわけではありません。

佐藤 信仰の面では変りないのですね。

小谷 そうです。

佐藤 品田君、ひとこと…

それを一時僧という）の方が百五十人ほど三カ月間修行してますが、起居容儀を見ても、話を聞いてみても、ただ伝統や習慣だからというのではなく、本当に真剣に修行にはげんでおりま

す。

佐藤 小谷先生、一時僧は減つてきたと聞いてますかいかがですか。

小谷 坊さんは朝托鉢に出ますが、その数を見ると確かに減つてます。だからといって一時僧が減つたというわけではありません。お互

い私の場合はこの国で修行してみたいといいういわば好奇心がもとで、あまり予備知識もなくやつて来ましたが来てよかつたと思います。日本にいる時はこの国の仏教を「小乗」といつて一段低いもののように思つてましたが、来てみますと違います。たとえばご住職の日常を拝見しますと、日本ではあまりお目にかかるないような偉いお方で、言葉などではなく体に力量が溢れている感じです。そのほかいろいろありますか、まだよく整理されておりません。

佐藤 では水野君。



水野

私は外国ははじめてですし、またお二人と違つて来て間もないのです。まだよくわかりませんが、日本でお授戒の時須弥壇の周りを戒師様はじめ主だった役職の人びとが「衆生仏戒を受くれば、即ち諸仏の位に入る。位大覺に同じうしおわる。まことに是れ諸仏のみ子なり」と唱えながらまわりますが、戒法を受ければそのままお釈迦さまである。得度を受けた坊さんはみなお釈迦様なのだ、そういう信心から坊さんを大事に敬つてくれるのだと思いまして。日本には坊さんをお釈迦さまの身代りとして見る考え方ないと

人との違つて来て間もないのです。まだよくわかりませんが、寺に入つたならば寺檀一致協力して寺をもりあげ信心を培養してゆくことが大事だと思ってます。また、大乗仏教と上座部仏教、だいぶ違うところが多いのですが、同じ仏教なので共通点もたくさんあると思いますし相互理解を深めてゆくことが大切だと思います。

落合 上座部仏教についての理解を深めてゆくにはタイ語の勉強が必要です。私は相当長くタイにいるつもりですので、本格的にタイ語の勉強をしようと思つてます

佐藤 頑張つてください。期待します。日本での仏教に欠けたもの。まず第一に戒律が挙げられるかと思います。上座部仏教の坊さんは二七の戒律を堅く守つておられる。だからこそ坊さんは私たちの身代りとなつて修行しておら

思います。それで私は帰国していつたい何が出来るかを考えていますが、日本の仏教の流れを変えることはできませんが、寺に入つたならば寺檀一致協力して寺をもりあげ信心を培養してゆくことが大事だと思ってます。また、大乗仏

れる。お釈迦さまの身代りなのだとして帰依を受ける。日本にはそれがない。だからその点に活を入れる必要があるのではないかと考えますが、どうですか。

落合 日本でもそうですが仏教にまつわるいろんな行事があります。そんな時ワット・パクナムには千人近くの人が集まります。蓮の花を持つて一人一人が何かを祈っている。その姿が実に真剣そのもので神々しく感じられます。日本ではガヤガヤ、ワイワイ、まるで雰囲気が違うんです。

年に何度かで
もこうした神
聖な時間を持
てるというこ
とは本当にし
あわせなこと
だと思いま



小谷氏

す。日本でもこうした静かな神聖な時間を持つことができるわけはないと思います。

佐藤 小谷先生、その点、どうでしょう。

りをしない、手を合わせない、そういう人が多いのですが、ここはもうしょっちゅう手を合わせる。寺詣りをする。これはえらい違いますね。タイでは国王自ら仏教に帰依し、ありとあらゆる儀式はすべて仏式でおこなわれている。それだけに坊さんはそれにこたえるべくしつかり戒律をまもつて修行しななくちやいかんわけです。

佐藤 皆さんはいま、日本仏教とは違った意味の戒律生活に入ってるわけですが、戒律生活についてうかがいましょう。まず一番つらいのは何ですか。

品田 女の人と話してもいけないというのはつらいですね。（笑声）日本ですと女の友だちもありデートしたり酒飲んだりできますが、こち

らでは握手などはとんでもないこと（笑声）視線が合うだけでもいけない。タイにはきれいなひとが多いんで（笑声）。これ一番つらいです。あとは、来た当時、一日二食というのがつらかつたです。最近はようやく慣れました。戒律というのは、つらいつらいと思ってるうちはまだまだで、自然に慣れてくると自分のものになつた感じですので、その積み重ねが大切だと思ひます。



日本での修行はいわば全体主義的な感じのものだが、こちらは上の人からとやかく注意されるようなことはない。全て自主的なもですか

べきかと常に自ら模索してゆかねばなりません。そういう意味では凄くきびしいものです。
水野 お店に入つて買物などする場合、女の人から直接お釣りを手渡して貰うことができるない。はじめは戸惑いましたが、このごろは慣れました。戒律は二二七もあり、全部よく知つております。同じく得度したタイの友人から、「懺悔しなさい」といわれることがあります。「なんで？」と聞くと、「お前歌を歌つたろう。あれはいけないんだ」と注意されました。私が小声で歌を口遊んで、「この歌知つてるか」といつたのがいけなかつたのです。こんな風でようやくわかりはじめたという段階です。

落合 戒律二二七といいますけど、それ以上あるともいえるし、逆にそんなにもないともいえると思います。細々としたことで戒律にはないが暗黙の了解で、これはしないことにしよう、

ときまつてるものがある。そうすると二二七以上になります。反面、タイでは仏教が生活化しており、一般の人びとが戒律をある程度知っているので、まもらざるを得ない状態にあります。戒律でなくあたりまえの生活になつてゐるんです。そうなると二二七以下ということになります。ですから戒律をまもることがきびしいというような感覚は全く持つてません。

ワット・パクナムは瞑想の寺として有名なので、瞑想について話し合つたが録音状態不良でよく聞き取れない箇所が多いのでこの頃割愛する

佐藤 貴重な体験談をお聞かせいただき有難うございました。

では、今後どのような道を歩まれるのかお聞かせください。

黒田 九十日の安居が済めば大事な修行が一段落するわけですから、あとは各自自由行動にしてください。一年で帰られる人はタイのいろ

いろのお寺をまわつて勉強なさるなり、また印度仏跡を参拝なさる方はそのままの姿でゆけばいろいろな面で好都合ですが、戒律の問題などでもむずかしい点もありますので、その点は小谷先生にご相談して失敗のないようにしてください。とにかく見聞をひろめることができ大切ですか
ら頑張つてください。

佐藤 落合君はどうしますか。

落合 私はいられる限り長くここにおるつもりです。今後ワット・パクナムに来る人も多いかと思いますが、それらの人には何か役に立ちたいと思つてます。

佐藤 ゼひそうしてください。

黒田 バンコクには小谷先生がおられ、一切の世話をしてくれます。そしてワット・パクナムにはアーチャンがおられて寺の内での世話をしてくれます。小谷先生はアーチャンとの名コンビで日タイ仏教友好親善の最高功

労者であります。ただ残念なことにアーチャンが病気になられ、今後お世話をお願ひすることは無理になつて來た。落合君が長くおつてくれて、今までのアーチャンに代つて寺の内での世話をしくださるなら、今後やつてくる留学僧にとつてたいへん有難いことだ。どこへおつても同じことだ。ひとつ頑張つてくれや。

落合 私は品田さんや水野さんのように僧侶ではなかつた。その私がいまこうして出家生活を送つていることはそれだけでもすばらしいことです。いろんな形で協力させていただきます。

それだけの力もないくせにおこがましいようですが、何とか協力させていただくつもりです。

黒田 私がタイに來たのが二十五年前、万事小谷先生のお世話になり無事安居を終えたわけですが、そのとき痛感したことは言葉が出来なくては、ということでした。タイの次にアメリカに行きましたが、ここでもやはり言葉が出来

なくてはと思ひました。それでなんとか言葉のできる人を造りたい、育成したい、そういう思ひがあつてはじめたのがこの育英会です。言葉ができるだけでもダメ、心があるだけでもダメ、心があつて言葉ができる。そうでなくてはならない。これは一日二日でできることではなく、「相続や大難」何十年と続けてはじめて出来ること。それだけにむずかしいがどうか頑張つてほしい。

佐藤 品田君は：

品田 どうしたらよいか私はまだ迷つてします。日本に帰つても入る寺はありませんし、一僧侶として生きるか。養子になつて寺の住職となるか。あるいはまだしばらくここにいるか。それともネパールにいつてラマ教の学院に入ります。まだきめかねております。バングラデッシュからの安居僧が友達ですので、安居が終つたら彼といつしょにバングラデッシュに行き、イ

ンド仏跡を参拝して来たいと思つています。

佐藤 水野君は？

水野 私は安居が終つたら十一月からタイ語学校に入り、いろんな人と話ができるようになりたい。せっかくタイに来たのだからこの国の人びとの出会いを大切にしたいと思つてます。

黒田 来年度の留学僧、目下募集中ですが、タイを希望する人があるかも知れません。その時は負担にならない程度でいいですから面倒みてください。

佐藤 育英会に何か望むことありますか。

落合 これ以上のことはありません。感謝でいっぱいです。

品田 やはり一番困るのがタイ語ができないということです。それで留学希望者があれば、派遣までの間にタイ語の基礎を勉強させていただけるようでしたら有難いと想います。

黒田 一二、三ヶ月では無理じやないかと思う。

アメリカにはタイと同様九名の人を送つてお
り、これは今後の課題で充分検討する。タイの
ほうは体験の生活だから語学力は検査の対象と
しない方針である。

水野 永平寺では毎年一人を海外に派遣して
いるが、総持寺の方でかつてはあつたそうで今
はありません。それで善光寺育英会の方から総
持寺にはたらきかけてもらえたると思います。
総持寺の雲衲にも希望者があると思います。

佐藤 昭和五十一年「仏教タイム」主催で「總

持寺の海外布教を考える」というテーマで座談
会がありました。その際黒田方丈が、タイに留
学僧を派遣してはと提案されまして、私も共鳴
しました。当時私は本山の出版部長でしたので
内部の根まわしをし、翌年三名の学僧をワツ
ト・パクナムに送りました。これが三年続きま
したが、希望者がなくなつて來た。雲衲にいわ
せると帰つたあの報恩安居（義務安居）が長

過ぎるといい、本山側にいわせると適格者がいないという。こうしたこと四年目からストップ状態となつた。黒田方丈はこの頃から「人まかせではだめだ、独力ででもやらなくては」と心に決するものがあつて、昭和五十九年、構想が順熟して翌六十年より派遣に踏み切つたのであつて、總持寺の場合はもう試験済みなのです。

本山でやらなくとも善光寺でりっぱにやつてるんですから、それでいいぢやないですか。
もう時間が来ましたので、これで終ります。
どうか皆さん、頑張つてください。小谷先生まことに有難うございました。

夜間飛行

若い頃「夜間飛行」という、ちょっと評判になつた洋画があつたが、その題名のごとく、ドン・ムアン空港を十時二十分に発つて翌朝六時五分成田に着いたのだが、出発前、空港で案じ

ていたトラブルがあつた。

黒田理事長と私はアーチャンから仏像をいただいた。その時私は、"持つて帰れるのかなア"と不安に襲われた。というのは十数年前はじめてワット・パクナムを訪れた時、ご住職から仏像をいただき、意氣揚揚と空港に来たところ、仏像の国外持出し禁止だという。せつかくいただいた仏像、没収されるのも心外だつたのでタイの旅行業者に「何かいい方法はないか?」と訊ねたところ「チップを出しては?」というので五千バーツを出した。しばらくすると旅行業者ニコニコしながら帰つて來た。首尾よく事が運んだんだなと思つてると予想以上の上首尾で彼はファースト・クラスの切符を手渡してくれた。「これはどうしたの?」と訊ねると、その返答がふるつてゐる。曰く、「日本の高僧が有難い仏像を持つて帰られるのだからエコノミー・クラスでは失礼だから」とのこと。おかげで仏さま

の功德で生まれてはじめてファースト・クラスに乗ることができた。

さて今回、果して仏像の持出しできるのだろうか。小谷先生に聞くと、「ワット・パクナムからいただいたといえど大丈夫」という。ところが空港の係員は「証明書がないとダメだ」といふ。さいわい三人の留学僧が見送りに来ており、

タイ語のわかる落合君が説明してくれるがなかなか首をたてにふらない。しかし相手が坊さんなので自分たちだけで判断してはまずいと思つたのだろう。上司を呼んで来た。よく説明すると、部下に対する手前もあつてか、『今度だけは!』といった調子で通してくれた。このたびは高僧にはしてもらえたが、まさに出家功德のひと幕であつた。

このごろは全日空もタイに乗り入れ、同じ十時二十分にJALとANAの飛行機が同時に飛び立つといったふうで、夜間飛行の乗客も多く

なり、サービスも向上したという。眠れれば時間の節約これに越したことはない。

成田に着くと、出発の日の朝のような天候状態だったためか、五日間見つづけた旅行の夢から覚めたような感じだつた。

著者略歴

樋口英夫（ひぐち・ひでお）

一九四八年、北海道生まれ。報道写真家。日本写真家協会会員。日本およびアジアの伝統的な暮らしを続ける人々を対象に取材を続けている。主な著書に写真集「日本のにしん漁」がある。

杉江幸彦（すぎえ・ゆきひこ）

一九五一年、愛知県生まれ。中央大学法学部卒業。上座部仏教園の東南アジア取材とともに、日本と深い関わりを持つ中国の人々の取材も継続している。

主な著書に、樋口との一連の共同作業によるミャンマーを取材した「黄金のバゴダ」（校成出版社）などがある。